

かまたみながもといせき
蒲田水ヶ元遺跡 2

— 蒲田水ヶ元遺跡第2次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1073集



ph.1 4号住居跡(南から)

2010

福岡市教育委員会

序

いにしえより大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、21世紀の今日も更なる発展を目指してさかんに都市開発が進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、福岡市東区蒲田3丁目における倉庫の建設に先立って実施した蒲田水ヶ元遺跡第2次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、礫層上に営まれた弥生時代終末期の集落跡が発見されました。竪穴住居跡のなかには、火災によって焼失した住居跡があり、その後はたくさんの土器が廃棄されていました。このような形で発見された住居跡は、当時の人々の生活と蒲田地区の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、吉田海運株式会社をはじめ多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

れ い け ん

1. 本書は、福岡市教育委員会が吉田海運株式会社の倉庫および事務所建設に先立って、平成20(2008)年6月25日~8月10日までに福岡市東区蒲田3丁目191-1外で緊急発掘調査した蒲田水ヶ元遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 遺構は、竪穴住居跡をSC、土器をSK、ピットはSPと記号化して呼称し、各調査区毎にすべての遺構を01から通番してNoを付した。
4. 本書に掲載した遺構と遺物の実測は小林義彦が、図面は小林と今村ひろ子が作成した。
5. 本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した。
6. 本書の執筆・編集は小林が行った。
7. 本書に係わる遺構と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している

調査番号：0817	遺跡記号：KMT-2	分査地図番号：2-0002
調査地點：福岡市東区蒲田3丁目191-1外		
工事面積：9,476m ²	調査対象面積：310m ²	調査実施面積：420m ²
調査期間：2008年6月25日~8月10日		

本文目次

I.はじめに	1
1.発掘調査にいたるまで	1
2.発掘調査の組織	1
3.立地と歴史的環境	3
II.調査の記録	7
1.調査の概要	7
2.基本層序	8
3.I区の調査	8
1)土壌	8
2)包含層出土の遺物	15
4.II区の調査	15
1)豊穴住居跡	15
2)土壌	21
3)包含層出土の遺物	22
5.III区の調査	22
1)包含層出土の遺物	22
III.おわりに	23

挿図目次

Fig.1 周辺道路分布図 (1/25,000)	2
Fig.2 蒲田水ヶ元遺跡周辺地形図 (1/25,000)	4
Fig.3 蒲田水ヶ元遺跡位置図 (1/10,000)	5
Fig.4 蒲田水ヶ元遺跡第2次調査区位置図	6
Fig.5 蒲田水ヶ元遺跡第2次調査区周辺現況図 (1/800)	7
Fig.6 第I区遺構配置図 (1/100)	8
Fig.7 第I区1~3・5~7号土壙実測図 (1/30)	9
Fig.8 第I区23~25・26号土壙実測図 (1/30)	10
Fig.9 第I区1~4号土壙出土遺物実測図 (1/4)	11
Fig.10 第I区5~7号土壙出土遺物実測図 (1/4)	12
Fig.11 第I区23~25・26~28・51号土壙出土遺物実測図 (1/4)	13
Fig.12 第I区包含層出土遺物実測図 (1/4・1/1)	14
Fig.13 第II区遺構配置図 (1/100)	15
Fig.14 第II区2号住居跡実測図 (1/60)	15
Fig.15 第II区2号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	16
Fig.16 第II区3・4号住居跡実測図 (1/60)	16
Fig.17 第II区3号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	17
Fig.18 第II区4号住居跡出土遺物実測図 (1/60)	17

Fig.19 第II区4号住居跡出土遺物実測図1 (1/4)	18
Fig.20 第II区4号住居跡出土遺物実測図2 (1/12)	19
Fig.21 第II区5・6号住居跡実測図 (1/60)	19
Fig.22 第II区5・6号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	20
Fig.23 第II区11・12号住居跡実測図 (1/60)	20
Fig.24 第II区12号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	21
Fig.25 第II区1・7・8・18・19号土壙実測図 (1/30)	21
Fig.26 第II区19号土壙出土遺物実測図 (1/4)	22
Fig.27 第II区包含層出土遺物実測図 (1/4)	22
Fig.28 第II区遺構配置図 (1/200)	23
Fig.29 第III-2区出土遺物実測図 (1/4)	24

写真目次

Ph.1 II区4号住居跡 (南から)	
Ph.2 I区全景 (南から)	
Ph.3 I区2号土壙 (北から)	
Ph.4 I区3号土壙 (西から)	
Ph.5 1号焼土壙、7号土壙 (北から)	
Ph.6 I区23号土壙 (南から)	
Ph.7 II区全景 (西から)	
Ph.8 II区2号住居跡 (西から)	
Ph.9 II区3号住居跡 (南から)	
Ph.10 4号住居跡遺物出土状況 (南から)	
Ph.11 4号住居跡遺物出土状況 (北から)	
Ph.12 5・6号住居跡 (南から)	
Ph.13 5号住居跡 (北から)	
Ph.14 5号住居跡遺物出土状況 (南から)	
Ph.15 6号住居跡 (西から)	
Ph.16 II区11・12号住居跡 (東から)	
Ph.17 III-1区全景 (東から)	
Ph.18 III-2区全景 (西から)	
Ph.19 III-2区東壁土層断面 (西から)	
Ph.20 出土遺物 (縮尺不同)	

表目次

Tab.1 蒲田水ヶ元遺跡、蒲田郡木原遺跡調査一覧表	3
----------------------------	---

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

蒲田水ヶ元遺跡は、福岡市東部の久山町や粕屋町と境を接する久原川と多々良川に挟まれた沖積地および丘陵上に立地する。この地はかつて表柏屋平野北部の穀倉地帯としてのどかな田園地帯が拡がっていた。しかし、近年は九州自動車道福岡インターチェンジに近い利便性に福岡都市高速道路が直結する交通アクセスの好条件が加わって周辺一帯には倉庫群が立ち並ぶ物流センターと化し、水田は次第に失われつつある。

こうした状況下で、吉田海運株式会社では、蒲田3丁目191-1外の9,478m²の土地に大型倉庫の建設を計画され、平成19（2007）年8月10日付で、埋蔵文化財第1課事前審査係に当該地の埋蔵文化財の有無を照会する事前審査願（事前審査番号19-2-374）が提出された。申請地は、「蒲田水ヶ元遺跡」として周知化された範囲に含まれ、隣接する蒲田部木原遺跡でも倉庫等の建設に先立って発掘調査が実施されていることから、遺跡の存在が十分に予測された。そのためには埋蔵文化財課では、平成19（2007）年8月29日に確認調査を実施した。その結果、申請地の地表下25~50cmには弥生時代の集落跡が濃密に拡がっていることが確認され、その成果を基に遺跡の現状保存について協議を行ったが建築計画の中止は不可能であった。幸いにも田面と道路面には比高差があり、加えて建物が構造的に簡易であることから、盛土と設計変更によって現状保存を図り、掘削が遺構面に達するエレベーターピットと拡幅される道路部について発掘調査による記録保存を図ることとなり、吉田海運株式会社との間に埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結して発掘調査と資料整理を行った。

発掘調査は平成20（2008）年6月25日よりはじめ、8月10日に無事終了した。しかし、この時期は梅雨から盛夏の厳しい暑さであり、夏草の生い茂った休耕田での発掘作業は体力的消耗も甚だしかった。これに加えて調査の終了間際に3日連続して激しい局地的豪雨に見舞われ、完掘寸前の遺構や遺物は土砂の流入と冠水によって崩落し、多くの成果を失う苦痛も味わった。ここに改めて作業に従事した方々の労苦とご協力いただいた吉田海運株式会社の関係各位に感謝いたします。

2. 発掘調査の組織

調査委託 吉田海運株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財第1課

文化財部長 矢野三津夫（平成20年）

埋蔵文化財第1課長 浜石哲也 山口譲治（平成20年）

埋蔵文化財第1課調査係長 米倉秀紀

調査庶務 文化財管理課 山本朋子 古賀とも子（平成20年）

調査担当 埋蔵文化財第1課 小林義彦

調査・整理作業

安部武代 安部ミユキ 石橋陽子 伊藤美伸 今村ひろ子 大瀬良清子 酒井兎美子

坂梨美紀 知花繁代 塚本よし子 土斐崎孝子 西田文子 馬場イツ子 濱フミコ

播磨博子 福田 操 森田ちはる 森田祐子 山口慶子

発掘調査にあたっては、吉田海運株式会社などの関係各位にご協力とご配慮をいただいた。改めて協力とご理解に深く感謝申し上げます。



Fig.1 周辺遺跡分布図(1/25,000)

3. 立地と歴史的環境 (Fig. 1~3)

蒲田水ヶ元遺跡は、博多湾に面した福岡市の東部に拡がる表柏屋平野に位置し、その一部は柏屋郡柏屋町にまたがっている。表柏屋平野は、多々良川や久原川、宇美川、須恵川などの開析によって形成された小平野で、福岡市東区箱崎から多々良、蒲田地域と柏屋郡久山町、柏屋町、篠栗町、宇美町、須恵町、志免町を含む地域を指し、北は立花山から城ノ越山、遠見岳などの山塊で裏柏屋平野と、また、南は月隈丘陵で福岡平野と境を接している。

蒲田水ヶ元遺跡は、多々良川と久原川に挟まれた狭隘な沖積地にあり、丘陵から西へ舌状に延びる微高地に立地している。この蒲田水ヶ元遺跡の西には久原川の開析によって北から浅い谷がL字形に湾入し、その対岸には蒲田部木原遺跡が開析谷を囲むようにして半島状に突き出している。

蒲田水ヶ元遺跡周辺では、九州自動車道や工場・倉庫群の建設による地域の物流基地化による発掘調査が実施され、丘陵上や微高地には旧石器時代から中世までの遺跡が報告されている。蒲田地区を概観すると、初現は旧石器時代に遡る。蒲田部木原遺跡の第1次調査では、ナイフ形石器や台形石器の包含層が確認されている。縄文時代の遺構は希薄である。次の弥生時代になると遺跡の範囲は急速に拡大する。この蒲田部木原遺跡では、竪穴住居跡や土墻からなる集落域を中心にしてその縁辺には祭祀土壇や甕棺墓、木棺墓などの墳墓域が形成される。古墳時代になると南に位置する部木八幡神社内に2基の前方後方墳と円墳からなる古墳時代前期の部木八幡古墳群が造営される。この時期集落域は一旦希薄になるが、後期には再び遺構は増加する。第3次調査区では、部木八幡古墳造営期の玉造工房跡とされる竪穴住居跡が検出され、多くの滑石製白玉が出土した。古代には第3次調査区で掘立柱建物跡があり、区内に屋敷墓を有する13世紀代の屋敷地が第6次調査区で検出されている。

一方、蒲田部木原遺跡から小さい谷を隔てた南側の丘陵上には、弥生時代終末期に比定される平塚古墳（福岡県指定史跡）がある。この平塚古墳は、大型の箱式石棺墓を埋葬主体とする墳丘墓で、内行花文鏡片や管玉が副葬されていた。

表柏屋平野には、この平塚古墳と同時期の墳丘墓が点在している。大型箱式石棺墓の周囲に列石を巡らして墓域を画した名子道2号墳や棺内に変形菱鳳鏡や管玉を副葬した大型の箱式石棺墓が酒殿遺跡にあり、亀山神社古墳も大型箱式石棺墓をもつ墳丘墓である。次に、これらの墳丘墓に統いて盤龍鏡や三角縁神獸鏡を副葬した畿内型の前方後円墳、天神森古墳が出現する。

蒲田水ヶ元遺跡ではこれまでに3地点で発掘調査が実施されている。遺跡西方の丘陵上に立地する第1次調査区では、縄文時代前期の轟式土器や曾畑式土器が出土した外に弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡からなる集落域とその縁辺には甕棺墓や祭祀土壇が営まれていた。また第2次調査区の北に位置する第3次調査区では、縄文時代や弥生時代の竪穴住居跡が検出されている。

遺跡名	次點番号	所在地	遺土量(㎥)	報告者	時期	主な遺構	主な出土遺物
福岡市水ヶ元遺跡	1	東区廻田191-1他	491	福岡市考古研究所	縄文時代～古墳時代～古墳時代	寺六井遺跡、櫛形器、環状器、輪状器、縄文土器	ナイフ形石器、台形石器、方舟形埴輪、瓦工房
福岡市水ヶ元遺跡	2	817 東区廻田191-1他	439	1,073	福生野村の小原一他	竪穴住居跡、土壇	鉢式小
福岡市水ヶ元遺跡	3	851 東区廻田193-1他	1590	福生野村中野一他/福岡市考古研究所	竪穴住居跡、土壇	縄文土器、陶土器、小棺墓、甕棺墓、木棺墓	
福岡市水ヶ元遺跡	1	7215 東区廻田(字御前)	909	23	五代前田	台形土壇	
福岡市水ヶ元遺跡	2	8452 東区廻田	8452	福岡市考古研究所	古墳時代2集	古墳時代～中世	寺六井遺跡、圓筒形埴輪、土壇、漆
福岡市水ヶ元遺跡	3	8511 東区廻田8623997他	2,888	116	福生野村一・丸山	寺六井遺跡、圓筒形埴輪、土壇	滑石製玉、玉成瓦
福岡市水ヶ元遺跡	4	9517 東区廻田2-277-1	2,915	331	福生野村一・丸山	竪穴住居跡、土壇	石鏡、石斧、石錘、石劍
福岡市水ヶ元遺跡	5	9658 東区廻田2-287-787-1	936	350	福生野村一・寺澤野	竪穴住居跡、土壇、漆	縄文土器
福岡市水ヶ元遺跡	6	9732 東区廻田4-376他	1,650	589	福生野村	掘立柱建物跡、土壇、漆、木棺墓	龜足形青磁瓶
福岡市水ヶ元遺跡	7	328 東区廻田3-711-1他	213	896	丸山時代	漆桶系、木棺墓、土壇、漆	
福岡市水ヶ元遺跡	8	430 本区廻田3-522-1他	78	50	丸山時代	漆桶系、木棺墓	
福岡市水ヶ元遺跡	9	469 東区廻田3-106-1	430	本区廻田	79	漆桶	
福岡市水ヶ元遺跡	10	556 東区廻田3-121-1他	1,850	976	弥生時代～古墳時代	寺六井加藤、圓筒形埴輪、土壇、漆	
福岡市水ヶ元遺跡	11	640 東区廻田3-1111-1他	417	977	福生野村一・星、占吉野山遺跡	漆桶系、木棺墓、土壇、漆	縄文土器、漆器、石臼丁、石臼
福岡市水ヶ元遺跡	12	845 東区廻田3-751-2	375	1,074	弥生時代中期～古墳時代	寺六井遺跡、土壇、火坑	

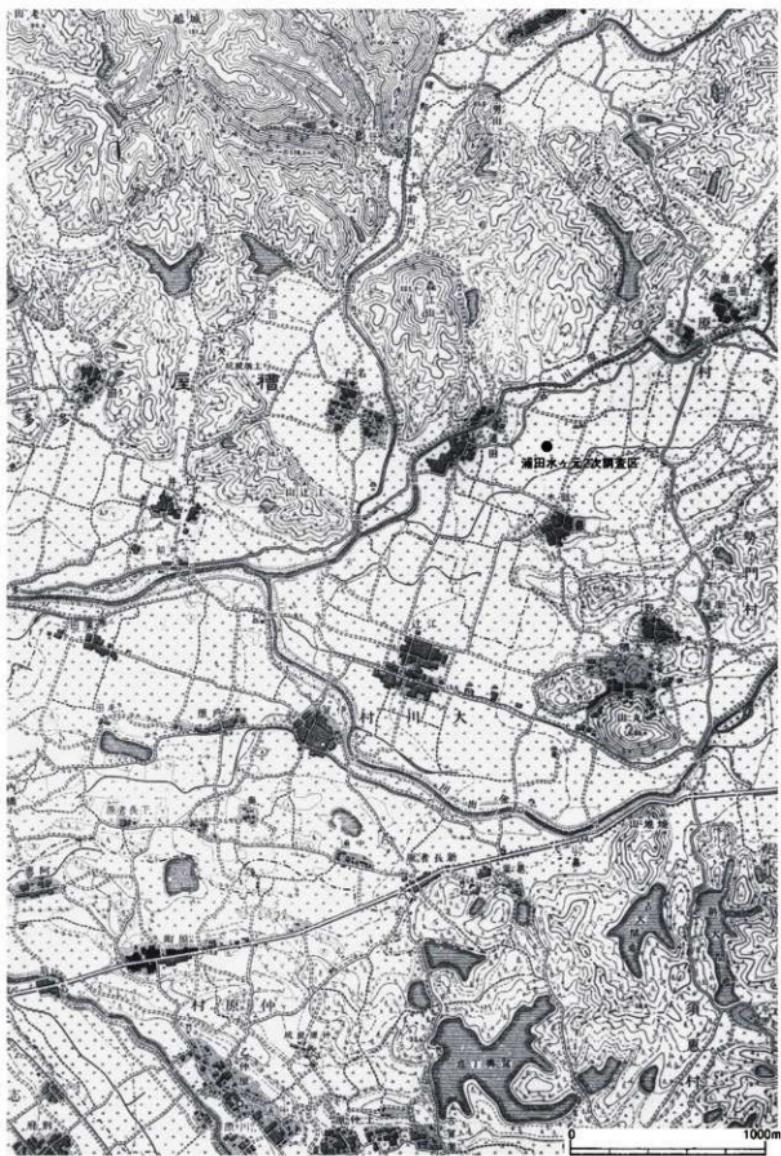


Fig.2 蒲田水ヶ元遺跡周辺旧地形図(1/25,000)

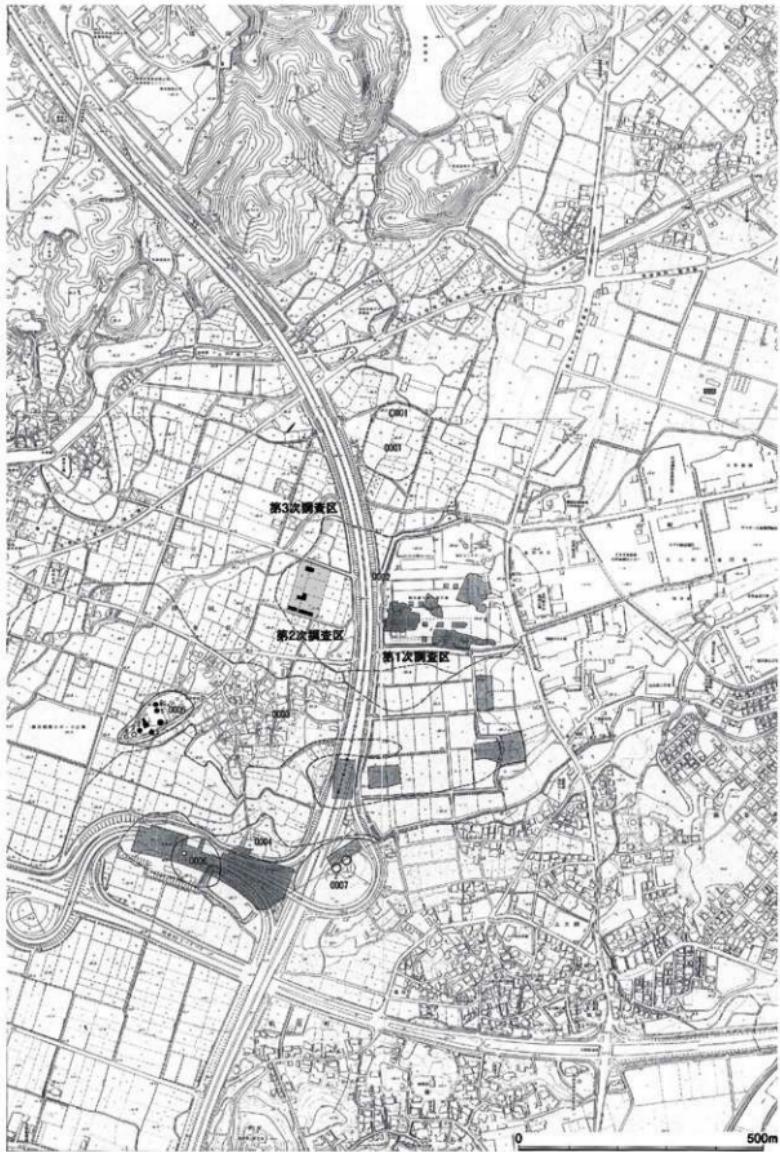


Fig.3 蒲田水ヶ元遺跡位置図(1/10,000)

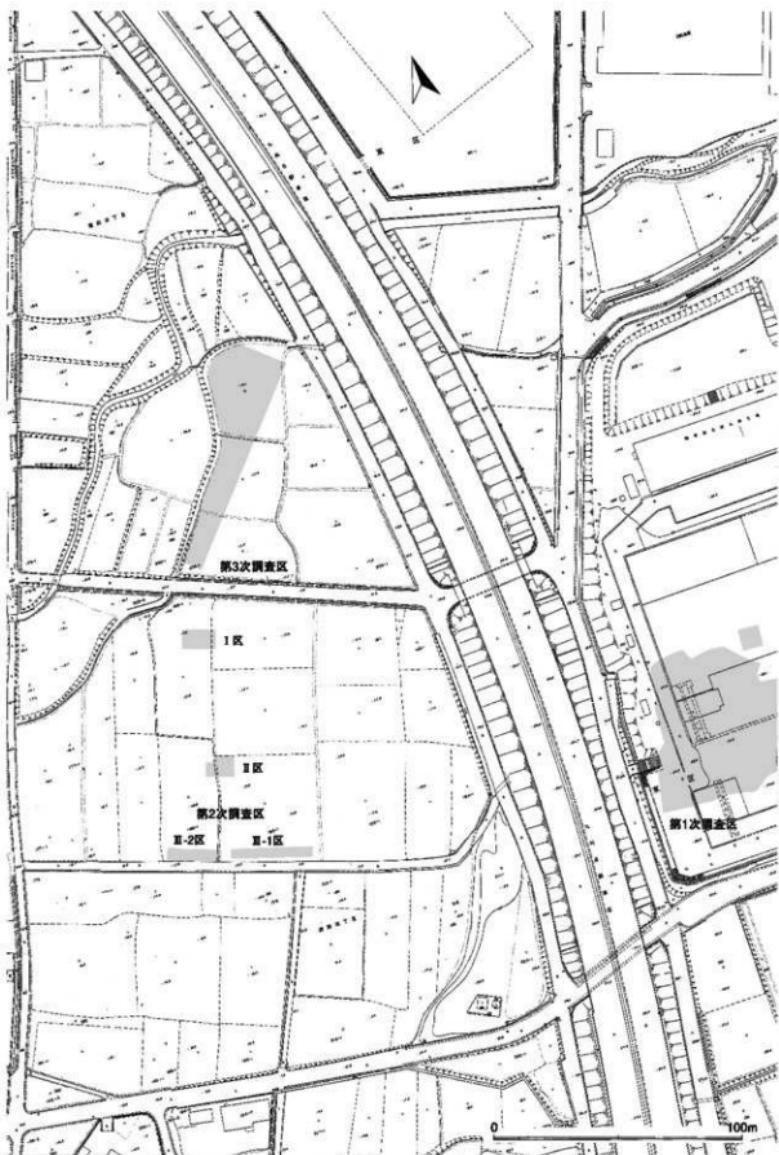


Fig.4 蒲田水ヶ元遺跡第2次調査区位置図

II. 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig. 4・5)

蒲田水ヶ元遺跡は、多々良川と久原川に挟まれた沖積地とその東に続く丘陵上に立地する。第2次調査区は、丘陵が西を蛇行する久原川にむかって緩やかに下り、沖積地に至るその西端の微高地上に位置する。調査区の西には、浅い開析谷を隔てて蒲田部木原遺跡が対峙している。

第2次調査区の現況は水田で、レヴェル的には東と北が高い。この蒲田地区の発掘調査は、昭和47(1972)年の九州自動車道福岡インターチェンジ建設に伴う蒲田部木原遺跡第1次調査に始まる。近年の物流基地化の進行で遺跡の様相が次第に明らかになりつつあるが、建築物の構造的性格から基礎あるいは外構施設の調査に留まることが多く、調査成果に制約がある。加えて、沖積地特有の地質的性格から調査区内でも土質の変化が著しく、遺構の把握に苦慮することが多々ある。

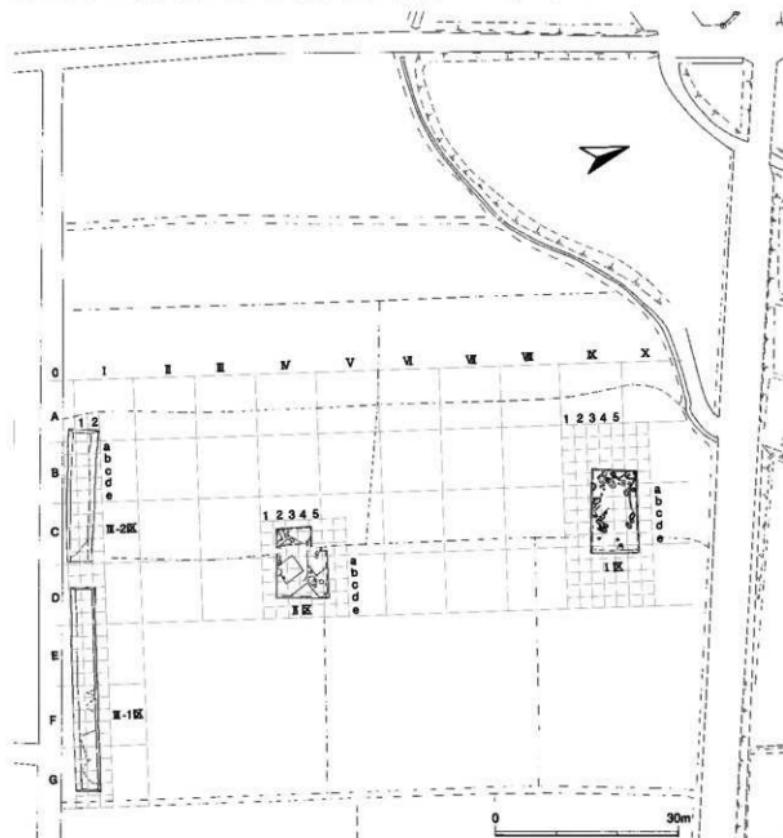


Fig.5 蒲田水ヶ元遺跡第2次調査区周辺現状図(1/800)

発掘調査は、平成20(2008)年6月25日に調査機材を搬入し、パワーショベルによる表土層の除去作業から開始した。調査地点は、申請地北部と中央部に配置されるエレベーターピットと南面する進入道路の拡幅部の3ヶ所で、北からI区、II区、III-1区、III-2区と仮称し、北側のI区から順に調査した。このうちII区では、狭小な調査区ながら火災住居跡をはじめ7棟の竪穴住居跡を検出した。夏の炎暑の中、遺構の多いII区の調査に時間が割かれ、調査工程に大幅な遅延が生じた。これに加えて調査終了間際に3日連続して局地的な集中豪雨に見舞われ、写真撮影を控えたI区は水没し、流入した土砂で遺物や遺構は押し流されてしまった。自然災害とは云え、担当者としての責めを痛感しながら8月10日に発掘調査は終了した。

2. 基本層序

第2次調査区は、舌状に延びた沖積地の微高地上にあり、地質的には混濁の多い複雑な在り方を呈している。基本的には耕作土下20~25cmで床土になる。床土は5cmの厚さで均一に馴らされていた。耕地の大規模化を図った圃場整備事業の所産である。この床土の下はG L-30~40cmで礫層あるいは黄褐色粘性シルト層になる。この礫層が基盤層で、I区やII区の東端では床土下で礫層になる。

一方、南西端のIII-2区では、黄褐色粘性シルト層が100cm以上の厚さで堆積し、その下層は遺物を含んだ黒茶褐色土になる。北東から南西へ厚さを増す黄褐色粘性シルト層は、久原川の沖積地形形成を示すものである。また、基盤層の礫層は、I区の北東隅で40cm以上の深さになり、30cmを越えたところで水が湧き出す。この黄褐色粘性シルト層上には、部分的に疎らな遺物を含む茶~暗茶褐色土層が堆積している。

3. I区の調査

I区は、東西が138m、南北が78mの調査区で、コンクリート畦畔を境として東側は床土下に礫層が露出している。一方、西側は疎らに土器を含む茶~暗茶褐色土が堆積していた。当初、この茶褐色土層を単に遺物包含層と考え、それを取り除くと礫層上に堆積した黄褐色粘性シルト層上で土壤等の遺構を検出した。遺構は、土壤13基+aで、大型の不整形土壤もあり、竪穴住居跡の可能性も考えられる。調査終盤には、局地的な集中豪雨に見舞われて遺物や遺構が未実測のまま流失し、記録に残せなかった。

1) 土 壤 (SK)

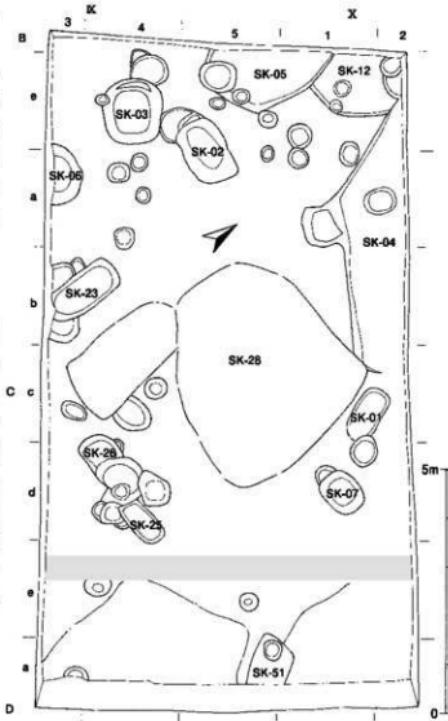


Fig.6 第1区遺構配置図(1/100)

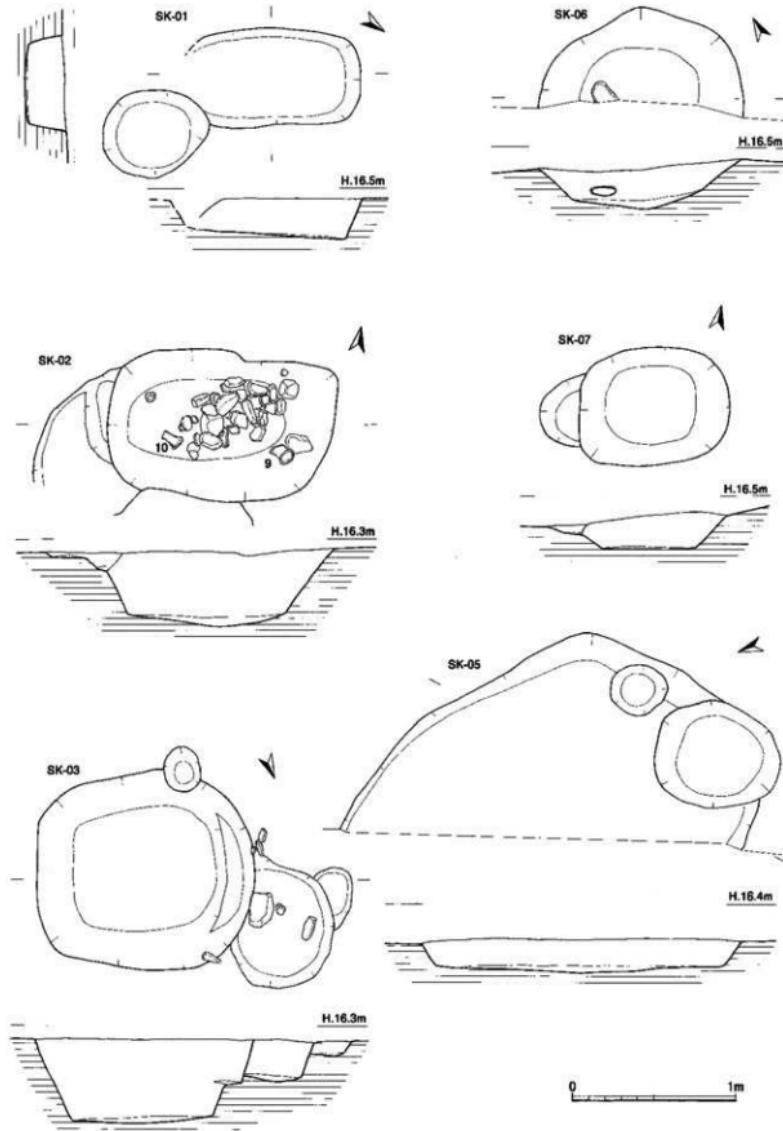


Fig.7 第I区1~3・5~7号土塚実測図(1/30)

1号土壤 SK-01 (Fig. 7・9 ph. 5)

調査区中央部の北壁際にある焼土壤で、7号土壤のすぐ西に位置する。南小口壁が不明瞭ながら長辺が110cm、短辺が58cmの隅丸長方形プランを呈する。主軸方位は、N-33.5°-W。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は24cm。壇底は北小口壁へ緩やかに傾斜し、断面形は逆台形をなす。壁面は被熱で赤変し、覆土中に焼土粒と炭灰が混入していた。

1は砂岩質の砥石の基底面で、砥面は表裏両側面の4面ある。幅は3.5~4.4cm、厚さは1.6~2.8cm。

2号土壤 SK-02 (Fig. 7・9 ph. 3・20)

調査区の西縁に位置し、北西に5号土壤、南西に3号土壤が隣接している。平面形は、長辺が138cm、短辺が93cmのやや不整な隅丸長方形プランを呈する。主軸方位は、N-78.5°-E。緩やかに立ち上がる壁面は、深さが47cm。壇底は浅く凹レンズ状に窪み、舟底状の断面形をなす。壇中には、拳~人頭大の礫石と弥生土器の器台や壺が東小口側から投棄されていた。

2~7は壺。2は口径が25.6cmで口縁部は上縁を平坦に仕上げた逆L字状をなす。3~4は口縁部が緩やかに外反する臺で、口径は3が28.6cm、4は30.2cm。5~7は底部で、5は上げ底になる。8~9は器台。8は底径が9cmで、端部を上方に摘み上げている。9は底径10.1cm、10は10.3cm。

3号土壤 SK-03 (Fig. 7・9 ph. 4・20)

調査区の北西端に位置し、すぐ北東には2号土壤がある。平面形は長辺が133cm、短辺が120cmの隅丸方形プランをなす。主軸方位はN-67°-W。壁高は52cmで、西壁には三日月状のフラット面が付く2段掘りの構造をなす。壇内には弥生土器の丹塗壺や壺、器台と礫石が投棄されていたが豪雨による冠水で原位置を保てなかった。

11は復原口径が8cm、器高が11.3cmの小型注口丸底壺。球形の胴部中位に孔径が6mmの注口が付

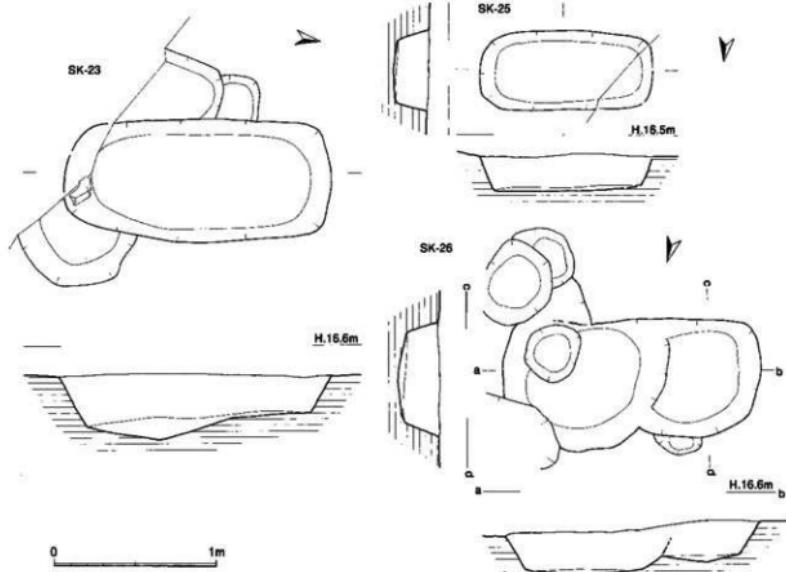


Fig.8 第I区 23・25・26号土壤実測図(1/30)

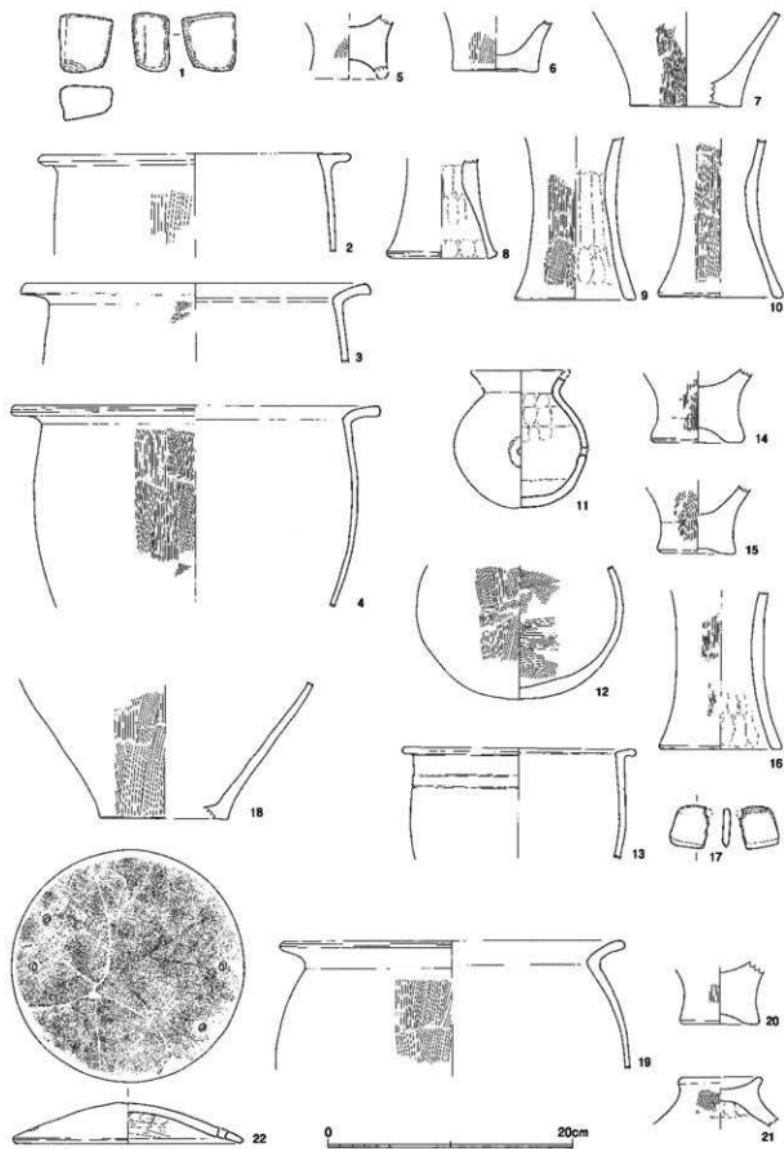


Fig.9 第I区1~4号土壤出土遗物实测图(1/4)

く。押圧ナデ調整の内面には粘土紐の輪積み痕が残る。淡黄白色～淡黄橙色。12は丸底壺の胴部下半。内外とも粗いハケ目。13～15は甕。13は口径が19.2cm。口縁部下に2条の横凹線が巡る。14・15は上げ底の底部。底径は14が⁷.6cm、15は6.4cm。16は底径が10.2cmの器台。17は石庵丁片。

4号土壤 SK-04 (Fig. 6・9 ph. 20)

調査区の北東縁に位置する大型の不整形土壤で、すぐ東には1号土壤がある。急峻に立ち上がる壁面は壁高が15～20cmを測り、壠底はフラットである。覆土は濃灰褐色～暗茶褐色土で、弥生土器の丹塗壺や甕、高坏のほかに器台や支脚、無頸壺片が出土した。状況的に住居跡の可能性もある。

18～20は甕。18は底径が10.6cm。19は口径が28.2cmで、口縁部は緩やかに外反する。20は底径が6.6cmの上げ底の底部。21は笠状の蓋。摘み部径は6.8cm。22は無頸壺の蓋。口径が19cm、器高は3.3cm。天井部は中心から放射状の粗いハケ目。

5号土壤 SK-05 (Fig. 7・10)

調査区の西縁に位置する大型の不整形土壤で、北西隅にある12号土壤を切っている。壁高は20cmで、断面形は逆台形をなす。壠底は砾石上にあり、中央部が浅く凹レンズ状に窪む。覆土は濃灰褐色土で、弥生土器の壺や甕、黒曜石片が出土した。

23・24は甕。23は口径が27.2cm。口縁部は上縁を水平に仕上げた逆L字状で、胴部は倒卵形になろう。24は底径7.1cm。

6号土壤 SK-06 (Fig. 7・10)

調査区南西部の南壁際に位置し、1m北には3号土壤がある。平面形は一辺が120cmほどの円形プランをなそう。深さが30cmの壁面は緩やかに立ち上がり、壠底は凹レンズ状をなす。覆土は濃灰褐色土で、弥生壺や甕、器台片がわずかに出土した。

25は底径が8cmの甕の底部。外面は粗いタテハケ目、内面は押圧ナデ調整。

7号土壤 SK-07 (Fig. 7・10 ph. 5)

調査区中央部の北縁に位置し、すぐ北には1号土壤がある。平面形は、長辺が90cm、短辺が72cmの隅丸方形プランをなし、主軸方位をN-76°-Eにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は23cm。壠底は平坦で、逆台形の断面形をなす。遺物は、弥生壺・甕・器台片が出土した。

26～31は甕。26は口径が28.8cm。口縁部は短く「く」字状に外反する。27～31は底部。31を除いて上げ底気味。底径は、27～30が⁶.7～7.4cm。31が8.8cm。32は丹塗壺の底部。

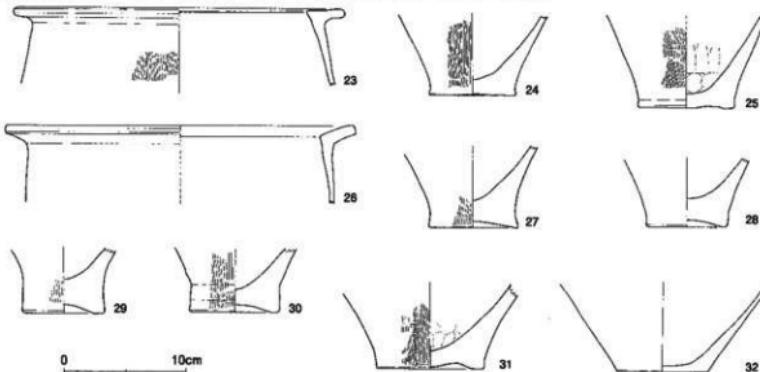


Fig.10 第I区5～7号土器出土遺物実測図(1/4)

23号土壙 SK-23 (Fig. 8-11 ph. 6)

調査区南壁際の西寄りに位置し、1.5m西には6号土壙がある。平面形は長辺が約155cm、短辺が77cmの隅丸長方形プランを呈する。壙底の北半部はフラットであるが、西半部は10cm余り凹レンズ状に窪む2段掘状の構造をなす。主軸方位はN-15°-E。遺物は丹塗りの弥生壺や甕が出土した。

33・34は甕。33は口径が29.4cm。端部が肥厚する口縁部は逆L字状に外反する。35はラッパ状に開く器台。底径は9.6cm。36は、長径が4.4cm、短径が3.5cmの土製有孔円盤。厚さは0.6cm。

25号土壙 SK-25 (Fig. 8-11)

調査区中央部の南壁際的位置し、130cm西には6号土壙がある。平面形は長辺が105cm、短辺が48cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN-83°-Eにとる。壙高は24cm。壙底は中央部が浅い

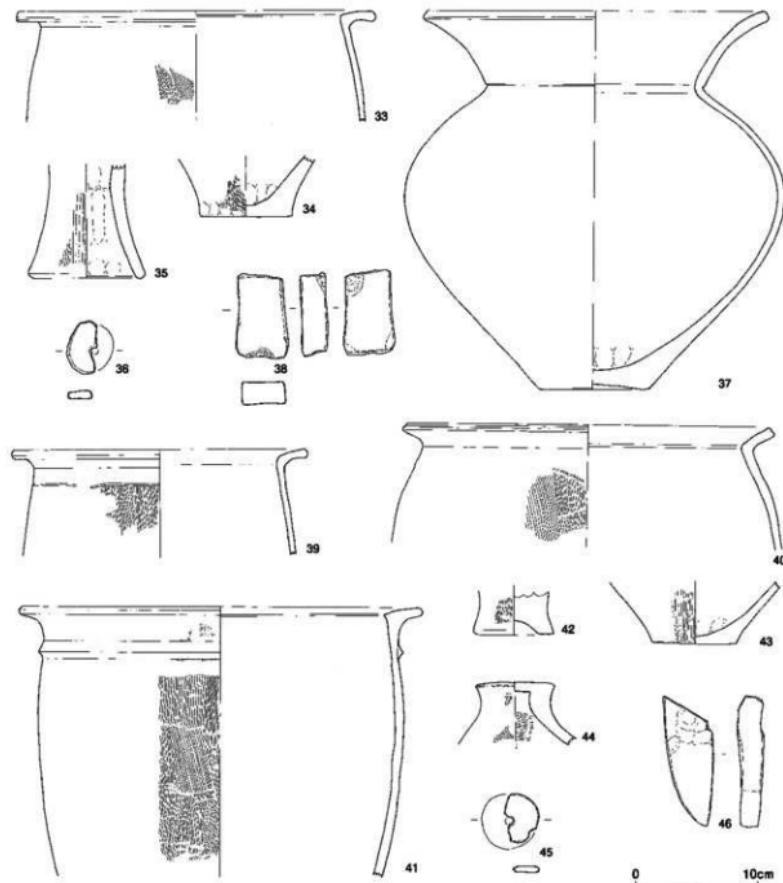


Fig.11 第I区 23・25・26・28・51号土壙出土遺物実測図(1/4)

凹レンズ状をなし、断面形は箱型。覆土は暗茶褐色土で、弥生壺や須恵器壺と瓶が出土した。

37は口径が28.2cm、底径9cm、器高が31.1cmの壺。口縁部は短く朝顔状に外反し、頸部には緩やかな段が付く。肩部は肩の張った倒卵形をなす。38は砂岩質の砥石。底面は麦表両側面の4面。

26号土壤 SK-26 (Fig. 8-11)

調査区の南東部に位置する小型の土壤で、平面形は長辺が約100cm、短辺が75cmの不整な長方形プランをなそう。緩やかに立ち上がる壁面は深さ33cmで、断面形は逆台形をなす。遺物は弥生土器の壺、甕、台付甕と器台片が出土した。

39は口径が24.3cmの甕。口縁部は大きく外反する。口縁部下には不連続な1条の横凹線が巡る。

28号土壤 SK-28 (Fig. 6-11)

調査区の中央部に位置する大型の不整形土壤で、一辺が350~400cmの不整な台形状を呈していたが、局地的な集中豪雨で泥田と化して遺物が流失し、実測できなかった。

40~42は甕。40は口径が30.4cm。短く外反する「く」字状の口縁部は内唇を小さく摘み上げる。41は口径が33cm。短い逆L字状の口縁部下に1条のシャープな三角凸帯が付く。43は底径が7.2cmの壺底部。44は甕の蓋。45は滑石製の有孔円盤。

51号土壤 SK-51 (Fig. 6-11)

調査区の西縁にある長方形プランの土壤で、平面形は長方形プランをなそうか。壁高は10cmで、箱型

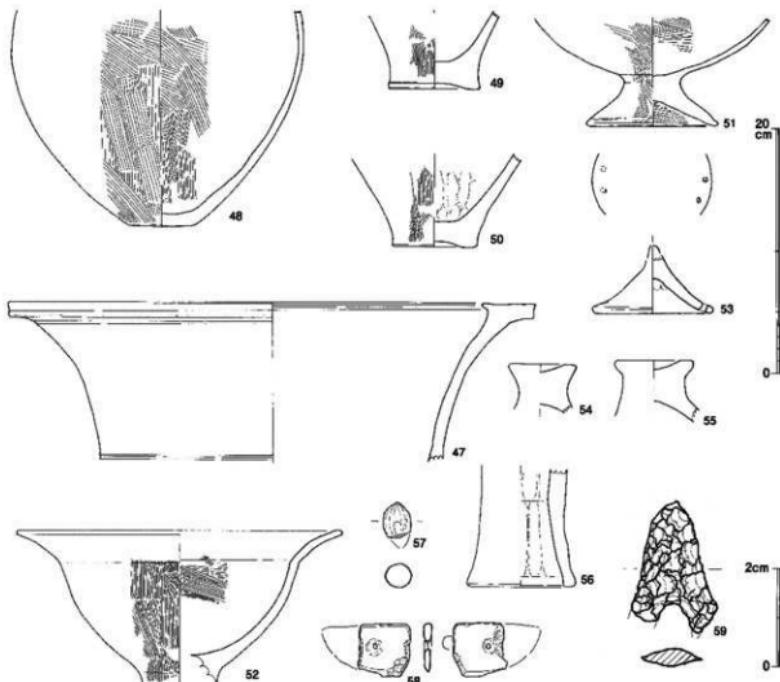


Fig.12 第I区包含層出土遺物実測図(1/4・1/1)

の断面形をなす。46は片刃石斧。

2) 包含層出土の遺物

47はS P - 11出土の鋤先口縁壺。口径は43.4cm。口縁部下に1条の浅い横凹線が巡る。48~50は壺。48は底径が6cm。49・50は中期の壺。51は底径が10.8cmの台付壺。脚部は短くラッパ状に開く。52は口径が26.8cmの台付鉢。口縁部は緩やかに外反し、胴部は半球形をなす。53~55は壺。53は口径が9.9cmの壺蓋。三角錐状の断面形をなす。口縁部に2孔一対の円孔を穿つ。54・55は壺の蓋。56は底径が8.9cmの器台。57は土製投弾。58は半月形をした輝緑凝灰岩質の石庖丁。59は安山岩質の打製石鎌。断面形が凸レンズ状になる押圧剥離加工で、基部は逆U字形の抉りが入る。

4. II区の調査

II区は、東西が11.5m、南北が5.6~8.4mの調査区で、地表面は3号住居跡の東壁より東には床土下に礫層が露出し、西側は黄褐色粘性シルト層になる。遺構は耕作土の床土下で7棟の住居跡と7基の土壙を検出した。このうち中央部の4号住居跡には、終末期の壺棺墓や壺・器台などがまとまって投棄されていた。いずれの住居跡にも明確な主柱穴はない。また、東端の住居跡の床面は礫層の露頭上にあり、その居住性については若干の検討を要そう。

1) 積穴住居跡 (SC)

2号住居跡 SC-02

(Fig. 14・15 ph. 8)

2号住居跡は、調査区中央部の北壁際に位置し、南壁は4号住居跡の北壁によって削平されている。平面形は一辺が400cm余の方方形プランをなそう。東壁と南壁際には幅が20~

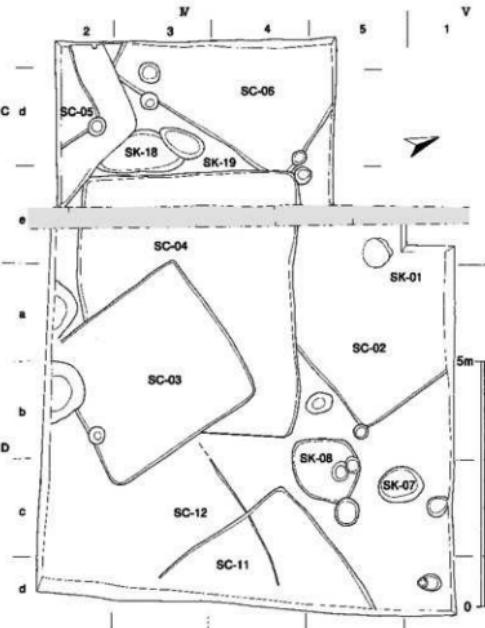


Fig.13 第II区遺構配置図(1/100)

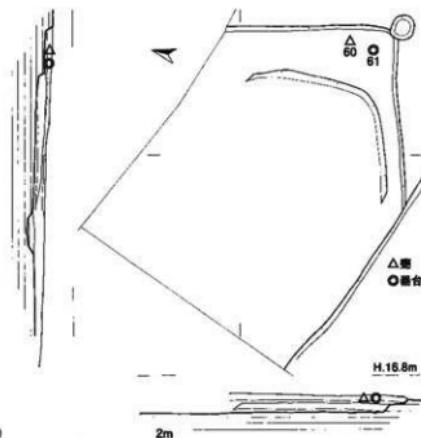


Fig.14 第II区2号住居跡実測図(1/60)

50cmのベッド状のフラット面がL字状に巡る。床面は浅く凹レンズ状に窪むが、中央部には黄褐色粘質土を薄く敷いて貼床としている。一方、ベッド状のフラット面は裸層の露頭が露出したままで、貼床はなかった。主柱穴は未検出。覆土は暗茶褐色土で、壺や丸底壺が出土した。

60は口径が16.6cm、器高が5.9cmの鉢。口縁部は偏平な半球形の胴部からストレートに外反する。胎土は精良で、明橙～淡黄橙色。61は口径が24.8cmの壺。内外ともにやや粗いハケ目。

3号住居跡 SC-03 (Fig. 16・17 p.h. 9)

3号住居跡は、調査区の南東寄りに位置し、4・12号住居跡と重複し、最も新しい。平面形は東西長が320cm、南北長が340～350cmの方形プランを呈する。壁高は5～12cmで、中央部が浅く凹レンズ状に窪む床面には黄褐色粘質土を層厚に敷き詰めて貼床としていた。主柱穴は未検出。また、床面の南東壁に寄って50×65cmの範囲に焼土粒と炭灰層の薄い堆積があり、炉跡の可能性がある。南壁は土壤と重複しており、遺物は混入がみられる。

62は手捏ねの小型台付壺。胴部は卵形を呈し、脚部は短くラッパ状に開く。胎土は精良で橙褐色。63は偏球形の胴部を持つ丸底壺。64は口径が14.2cmの土師器壺。

「く」字状の口縁部は内外唇を摘み出し、その間に深い凹線が巡る。65は口径が28cmの壺。逆L字状の口縁部は内唇を小さく摘み出す。66は口径が15.7cm、脚部径が13.6cm、器高11.9cmの高壺。壺部は下半に緩やかな稜を作り、口縁部は大きく外反する。ラッパ状に開く脚部は大きく屈曲して内湾し、対称位に4孔を穿つ。67は鐵錐の基か。断

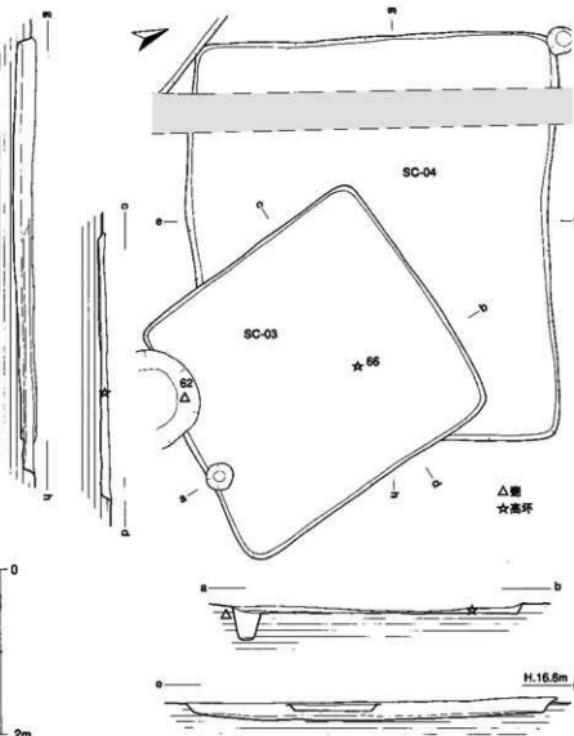


Fig.16 第II区3・4号住居跡実測図(1/60)

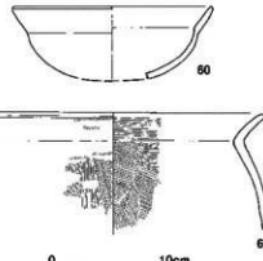


Fig.15 第II区2号住居跡出土
遺物実測図(1/4)

面形は四角形。68は砂岩質の砥石。

4号住居跡 SC-04

(Fig. 16-18-20 p.h. 1-10-11-20)

4号住居跡は、調査区の中央部にあり、2・3・5・6号住居跡と複雑に重複している。個別的には南東隅壁は3号住居跡に、南西隅壁は5号住居跡に削平され、北西隅壁は6号住居跡を、北壁は2号住居跡を切っており、その前後関係はSC02・06→SC04→SC05・03となる。平面形は東西長が505cm、南北長が450cmの長方形プランを呈する。床面は黄褐色粘土質を敷き固めて貼床にしていった。この床面上で炭化材を検出した。炭化材は幅が8~15cmで、東壁と西壁側から中央に倒れるような状態で出土し、その隙間には直交する炭化材や屋根材らしき炭化物も出土した。また、中央部から北壁にかけて壇や支脚や器台に混じって大型甕が投げ込まれたような状態で出土した。このことは火災家屋の産みが土器の廃棄壠として再利用されたことを示すものである。主柱穴は未確認。

69・70は小型壺。69は口径が13.2cm、器高が11cm。「く」字状の口縁部は緩く外反し、胴部は偏球形をなす。70は口径11.1cm、器高は15.1cm。口縁部は球形の胴部から直口気味に立ち上がる。71~76は口縁部が「く」字状に外反する壺で、胴部はラグビー・ボール状をなす。調整は内外面とも粗いハケ目。71は口径14.8cm、器高が16.1cmの小型品。72は口径20.6cm、器高は25.6cm。73は口径が20.6cm、器高は25.6cmで5.4cmの丸底気味の底部がつく。75は口径が17.7~18.6cm、器高は28.9cmで口縁部はストレートに外反する。76は口径が24.1cm、器高は31cm。77・78は器台。受部は大きく外反し、脚裾は内唇を小さく摘み出す。77は受部径が15cm、脚裾径は18.3cm、器高は17.7~18.4cm。78

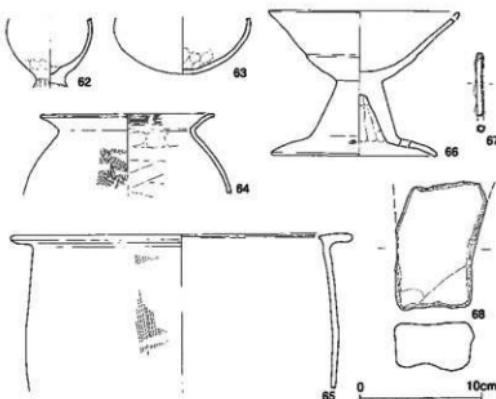


Fig.17 第II区3号住居跡出土遺物実測図(1/4)

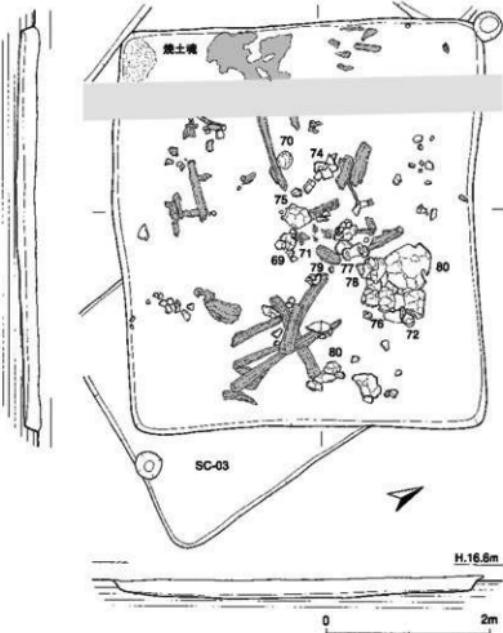


Fig.18 第II区4号住居跡出土状況遺物実測図(1/60)

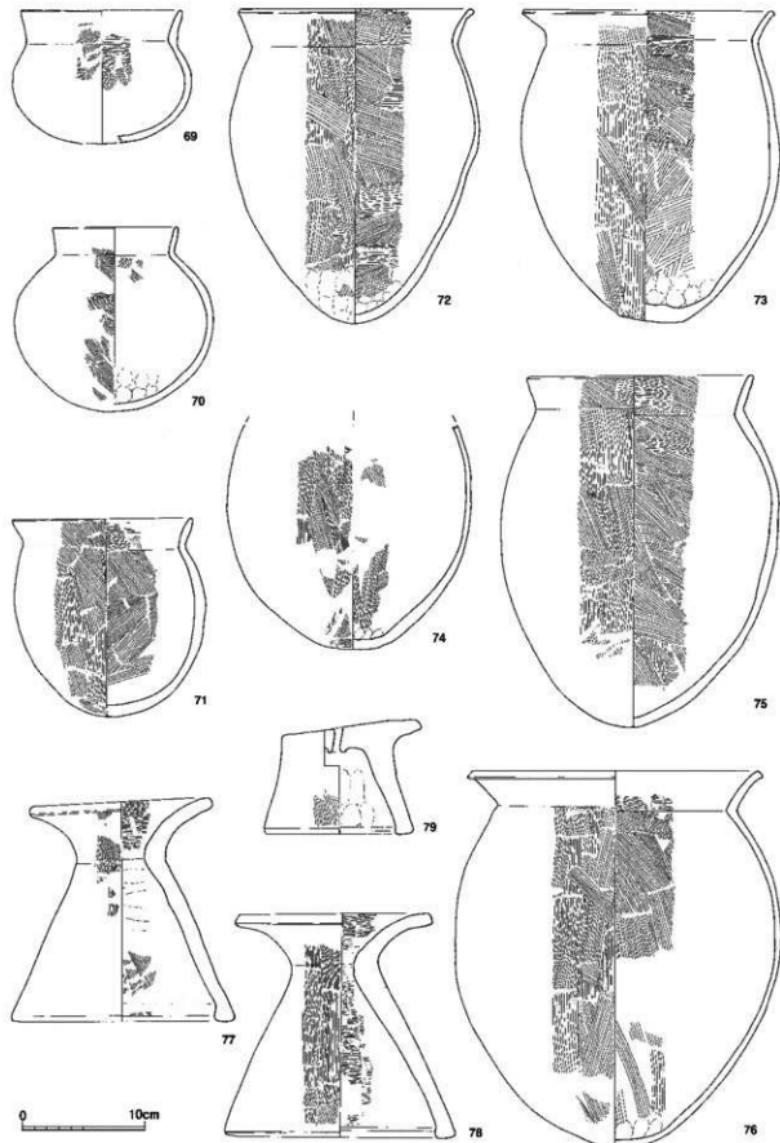


Fig.19 第II区4号住居跡出土遺物実測図1 (1/4)

は受部径が16.2cm、脚裾径は18.9cm、器高は17.7~18.4cm。79はいわゆる杏型の支脚。斜行する受部は一方を嘴状に摘み上げ、中央には孔径が5~7mmの円孔を穿つ。

80は底径が42~44cm、器高が82cm + α の大型甕。胴部は肩の張らない砲弾形をなし、頸部下に三角凸帯、胴部には2条の「コ」字凸帯を18~21cmの間をおいて巡らせていく。頸部下の三角凸帯にはヘラ先工具によるナナメの刻み目を施してある。口縁部はこの三角凸帯から直口気味に立ち上がって外反する。

5号住居跡 SC-05 (Fig. 21・22 ph. 12~14)

5号住居跡は、調査区の西南部にあり、東壁は4号住居跡と1号土塙を切っている。住居跡は大半が調査区外に拡がり詳細は明らかでないが、平面形は一辺が350~400cmほどの方形プランをなす。北壁下には幅が10cm、深さが5~7cmの周溝が巡るが、北東隅壁下で収束している。また、北壁と東壁側には幅が50~70cmのベッド状のフラット面が付設され、床面との比高差は10~15cmある。ベッド状遺構の北東隅には径が35cm、深さが22cmのピットがある。床面は平坦で、中央部に貼床の痕跡が認められた。遺物は、甕や鉢・器台のほかに滑石製紡錘車が出土した。

81は口径14.8cmの甕。「く」字状の口縁部は、短い倒卵形の胴部から緩やかに外反する。82は口径が25.2cmの甕。逆し字状の口縁部は内唇が小さく張り出す。83は受部径が10.1cmの器台。84は直径が4.4cm、孔径が0.7cm、厚さが1.4cmの滑石製紡錘車。断面形は台形。

6号住居跡 SC-06

(Fig. 21・22 ph. 15)

6号住居跡は、調査区の西部にあり、北東隅壁は4号住居跡に、南東隅壁は5号住居跡に削平されている。平面形は、435cmある南北長から一辺が450cmほどの方形プランに復原できよう。壁高は北壁が28cm、南壁は38cm。平坦な床面は中央部が浅く四レンズ状に窪み、黄褐色粘質土を薄く敷き固めて貼床としていた。また、北壁際の床面には赤変があり、焼土粒と炭片が散らばって

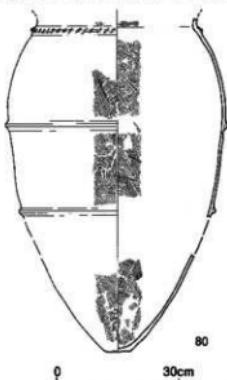


Fig.20 第II区4号住居跡出土
遺物実測図2(1/12)

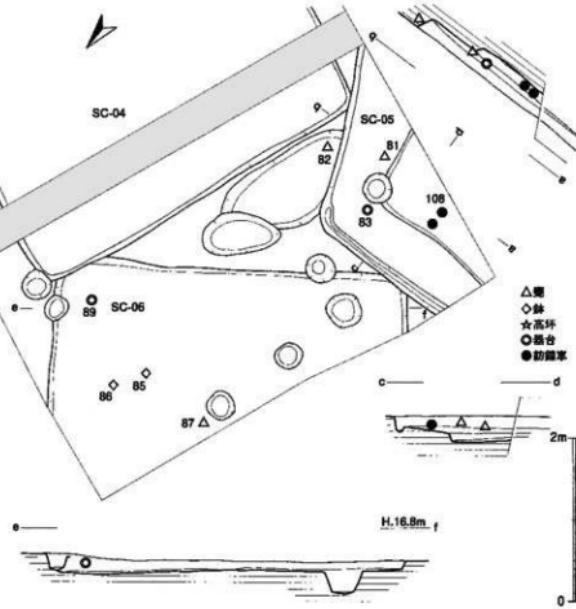


Fig.21 第II区5・6号住居跡実測図(1/60)

いた。覆土は濃茶～暗茶褐色土で、床面上には甕や器台片がまとまって散乱していた。

85・86は鉢。85は口径14.2cm、器高が8.2cm。口縁部は内唇を小さく摘み出している。86は口径12.2cm。口縁部は緩やかに内傾し、上縁は水平に整えている。87は口径が26cmの甕。「く」字状の口縁部は上縁と外唇下に横凹線が巡る。88・89は器台片。

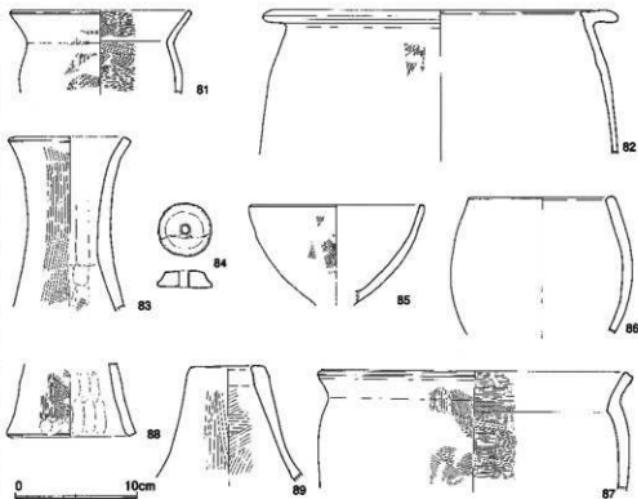


Fig. 22 第II区5・6号住居跡出土遺物実測図(1/4)

台。89は受部径が6cm。受部上縁は水平で、内側には指頭押圧による凹線状の緩やかな凹みが巡る。

11号住居跡 SC-11 (Fig. 23 ph. 16)

11号住居跡は、調査区の東部にあり、12号住居跡よりも新しい。平面形は一辺が400cmほどの方形プランをなそう。床面は礫石上にあり、貼床は確認できなかったが、居住性を勘案すると敷き藁等をした可能性も無くはない。北東隅壁寄りに直径が30~35cm、深さが19cmのピットがある。

12号住居跡 SC-12

(Fig. 23・24 ph. 16・20)

12号住居跡は、調査区の東部にあり、4・11号住居跡と重複し、最も古い。平面形は一辺が400~450cmほどの平面プランになろうか。礫石上に掘り込まれた床面は11号住居跡の床面下にあり、壁高は16~19cm。貼床は確認できなかった。

90は口径8.8cm、器高が12.8cmの壺。直口する口縁部は小さく外反し、球形の脇部には小さな平底が付く。91は手捏ねの小型鉢。口

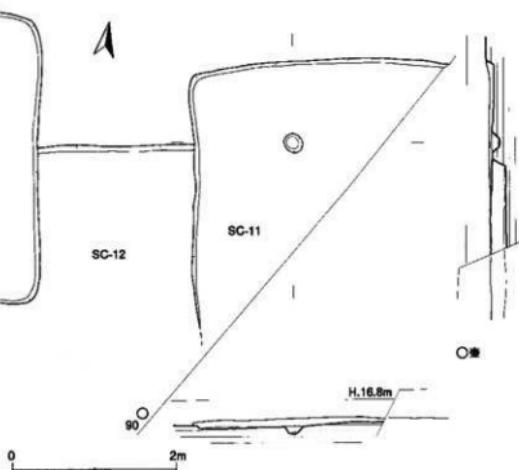


Fig. 23 第II区11・12号住居跡実測図(1/60)

径が9.3cm、器高は6.6cm。口縁部は半球形の脣部から直口する。

2) 土 壤 (SK)

1号土壤 SK-01 (Fig. 25)

1号土壤は、調査区の中央部北寄りにある焼土壤である。平面形は、直径が60cmほどの円形プランを呈し、北壁と南西壁は被熱で著しく赤変していた。断面形は凹レンズ状をなし、炉内には焼土粒と炭灰層が堆積していた。

7号土壤 SK-07 (Fig. 25 p.h. 7)

7号土壤は、調査区の北東隅に位置し、すぐ南西には8号土壤がある。平面形は、長辺が92cm、短辺が72cmのやや不整な梢円形プランを呈し、主軸方位をN-15°-Eにとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、壁高は23cm。断面形は浅い舟底状をなす。覆土は暗茶褐色土。

8号土壤 SK-08 (Fig. 25 p.h. 7)

8号土壤は、調査区の北東部に2号住居跡と11号住居跡に挟まれた空間にある。平面形は、75~85cmの不整円形プランを呈する。壇底はフラットで、断面形は浅い箱形をなす。覆土は暗茶~暗茶褐色土。

18号土壤 SK-18 (Fig. 25 p.h. 7)

18号土壤は、調査区東部の4~6号住居跡に囲繞された三角地帯の中にあり、19号土壤の北壁

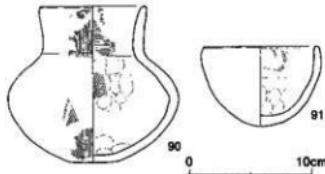


Fig. 24 第II区12号住居跡出土遺物実測図(1/4)

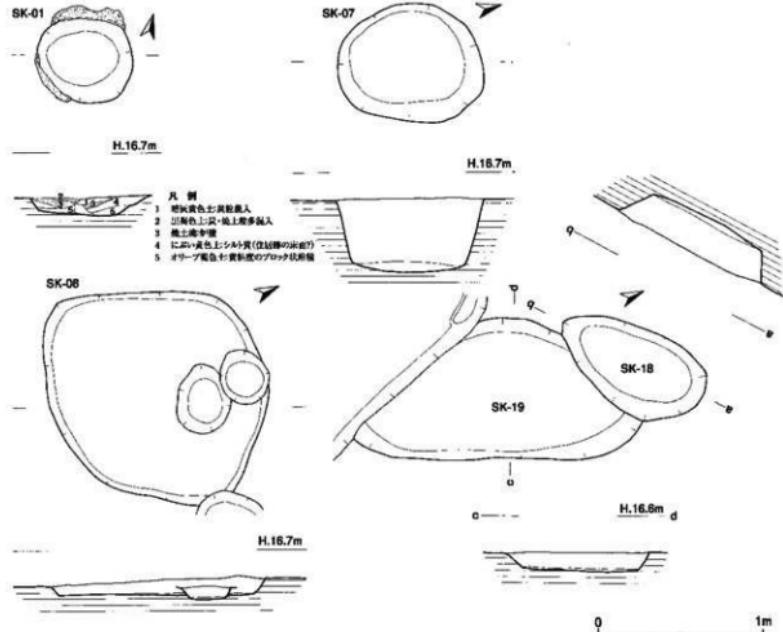


Fig. 25 第II区1・7・8・18・19号土壤実測図(1/30)

を切っている。平面形は、長辺が98cm、短辺が52cmの梢円形プランを呈し、主軸方位をN-51°-Eにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は25cm。廣底は浅い凹レンズ状をなし、断面形は逆台形。覆土は暗茶～灰茶褐色土。

19号土壤 SK-19 (Fig. 25・26 ph. 7)

19号土壤は、調査区東部の4～6号住居跡に囲まれた狭い三角地帯の中にあり、北東壁は18号土壤に、また南西壁は5号住居跡に削平されている。平面形は短辺が87cmで、長辺が190cmほどに復原されるやや不整な梢円形プランをなそう。主軸方位はN-24°-E。断面形は浅い逆台形をなし、壁高は10cm。

92は凝灰岩質の石庖丁片。身幅は3.6cm、厚さは3.5mm。刃部は両面から研ぎ出している。

3) 包含層出土の遺物

93は口径が13.6cmの壺。口縁部は卵形の胴部から直口して立ち上った後に小さく外反する。外面はタテハケ目、内面はナナメ～ヨコハケ目。淡黄橙色。94は口径が35.6cmの高壺の坏部。

5. III区の調査

第III区は、申請地南縁の道路が拡幅されることに伴う東西に長い調査区である。現況は東から西へ低くなる3枚の水田であるが、西端の休耕地は湧水が甚だしく調査不能と判断して、東側2枚の休耕地について発掘調査を実施した。調査区は東からIII-1区、III-2区とし、長さはIII-1区が33.5m、III-2区が21mに及ぶ。試掘調査では、III-1区がGL下50cm、III-2区がGL下35cmで黄褐色粘質土になり、その面で遺構を検出していた。しかしながら、下端幅が250～280cmと狭長な調査区の制約から1区の東端でGL-70cm標高16.2m、2区の西端でGL-110cm標高15.7mまで掘り下げて遺構の検出を図ったが、明確な遺構を検出することはできなかった。但し、部分的に若干の遺物を含んだ暗茶～黒茶褐色土が曖昧に括り遺構状を呈していたが、明確なプランや壁面は確認できなかった。一方で、III-2区西端ではGL-85cm標高15.95mの暗茶褐色粘性土層からは壺や甕などの遺物がまとまって出土した。この暗茶褐色粘性土は層厚が90cmあり、その下は暗灰黄色シルト質土を挟んで砂礫～小砾層になる。標高は14.9cm。

1) 包含層出土の遺物

(Fig. 29 ph. 20)

95は口径が12cm、胴部最大径が25.8cmの壺。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は球形をなす。96は口径が14.5cm、器高が8.9cmの丸底壺。口縁部は偏平な半球形の胴部から鋭く屈曲してストレートに外反する。胎土は精良で、色調は淡黄橙色。97～100は鉢。97は口径が11.8cm、器高は6.3cmで突起状の小さな底部が付く。体部は内溝気味に立ち上がり、口縁部は小さく直立す

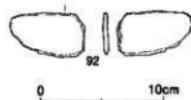


Fig. 26 第II区 19号土壤
出土遺物実測図(1/4)

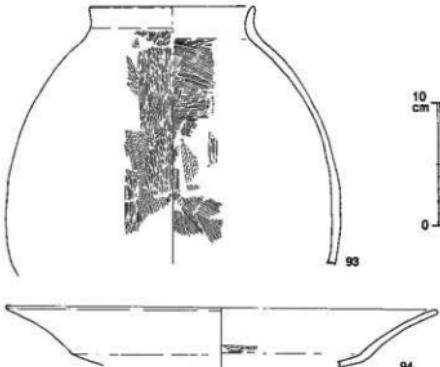


Fig. 27 第II区 包含層出土遺物実測図(1/4)

る。98は口径が10.6cm、器高が6.2cmの半球形の鉢。直口する口縁部は小さく内傾する。99は口径17.2cm、底径7.5cm、器高は10.1cm。体部はストレートに外反する。内面は指頭押圧ナデ、外面は丁寧なナデ。100は口径が13.4cm、底径6.8cm、器高は14.3cm。直口する口縁部下には1条の浅い横凹線が巡る。101は口径が24.6cm、器高が13.5~16.1cmの鉢。肉厚で、体部はストレートに外反し、口縁部は短く直口する。胎土には微細~細砂粒と雲母微細を含む。102は手捏ねのミニチュア土器。底径3.6cm。103~105は台付鉢の脚台。脚部は短くラッパ状に外反する。底径は103が5.5cm、104が6.6cm、105が6.5cm。106~108は弥生甕。底径は106が7.6cm、107が8.2cm。109は口径が13.6cmの土師器甕。口縁部は短く「く」字状に外反し、球形の胴部は肩の張りが弱い。内面はヘラケズリー押圧ナデ、外面は叩き後にハケ目調整。110は台付甕。脚部はラッパ状に外反する。胴部は細いグラス状をなす。胎土は粗く、多くの石英小~中砂粒のほか少量の赤褐色粒と雲母微細を含む。111は脚径が12.2cmの高坏。ラッパ状の脚部はストレートに開いて鋭く屈曲して短く外反する。胎土は精良で、細砂粒と少量の赤褐色粒を含み、色調は明橙色。112は幅が2~2.5cmの手持タイプの砥石で、砥面は表裏2面。

III. おわりに

蒲田水ヶ元遺跡のある蒲田地区は、近年急速に進む物流基地化で大規模な倉庫群が立ち並び、それに伴って発掘調査事例が増え、その歴史的様相は次第に明らかになりつつある。ここで本調査で明らかになった成果を簡単に整理し、後途に託したい。

蒲田水ヶ元遺跡は、多々良川と久原川の開析によって形成された沖積地の微高地に立地している。地質的には基盤層の礫層上をシルトの再堆積層が覆う複雑な土質をなしている。加えて広い対象地に反して建築物の構造的性格から調査範囲を最小限に絞り込む観定的な調査は、遺構検出の難しさとその拡がりを十分に把握することができなかつた。調査の在り方を再検討する余地を含んでいると云えようか。

第2次調査では、弥生時代中期~終末期の竪穴住居跡7棟や土壙などの集落域を構成する多くの遺構が拡がっていることが明らかになった。傾向的には北側のI区には弥生時代中期の遺構が拡がり、中央部のII区には後期末の竪穴住居跡群が拡がっている。この住居跡の中には焼失した火災住

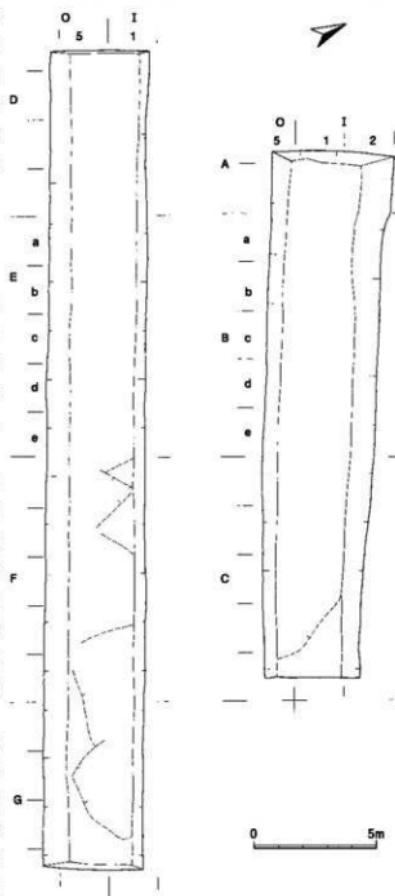


Fig.28 第III区遺構配置図(1/200)

居跡があり、被災後には廃棄壠としてまとまった壺や器台などが投棄されていた。また、廃棄土器の中には終末期の大型壺があり、集落域の縁辺部に墓域が営まれていたことを想起させる。この壺棺の形状は糸島地方に分布するいわゆる神在式の範疇に含まれるが、そのスマートさは異なった形状を示している。早計ながら豊前的な要素が窺えようか。また、住居跡の中には縄層上に貼床の確認できないものがある。藁草の敷設は容易に想起されるが、その居住性には懷疑的にならざるを得ない。敢えて立地する要因は何か、開折谷を挟んで対峙する蒲田部木原遺跡を含めた遺跡の展開を検討することが望まれ、今後の調査事例を待って改めて後述したい。

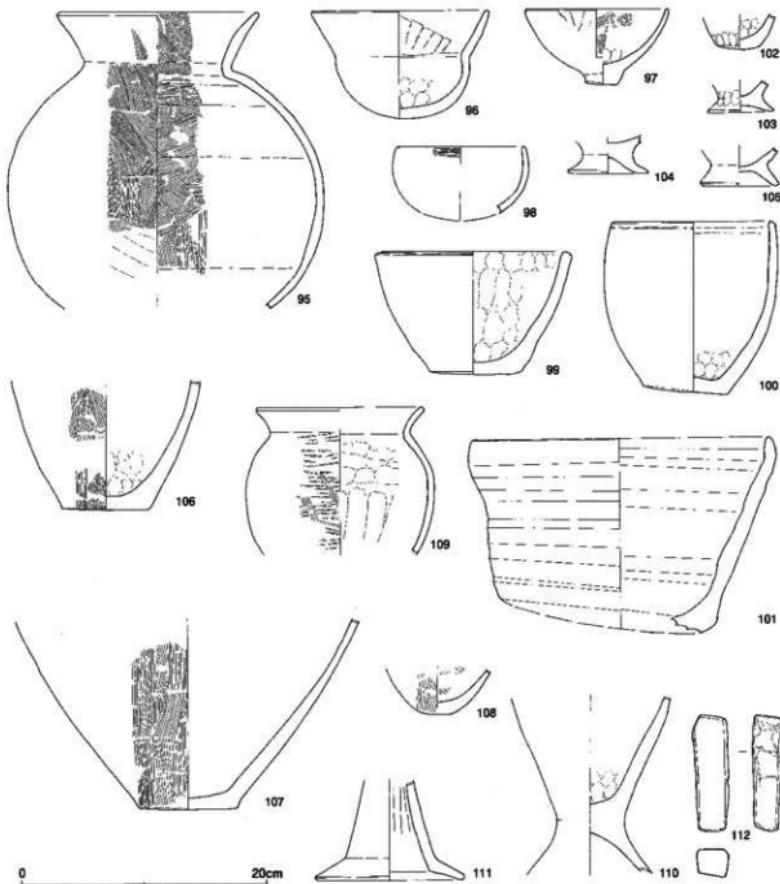


Fig.29 第III-2区出土遺物実測図(1/4)



ph.2 I区全景(南から)



ph.3 I区2号土壙(北から)



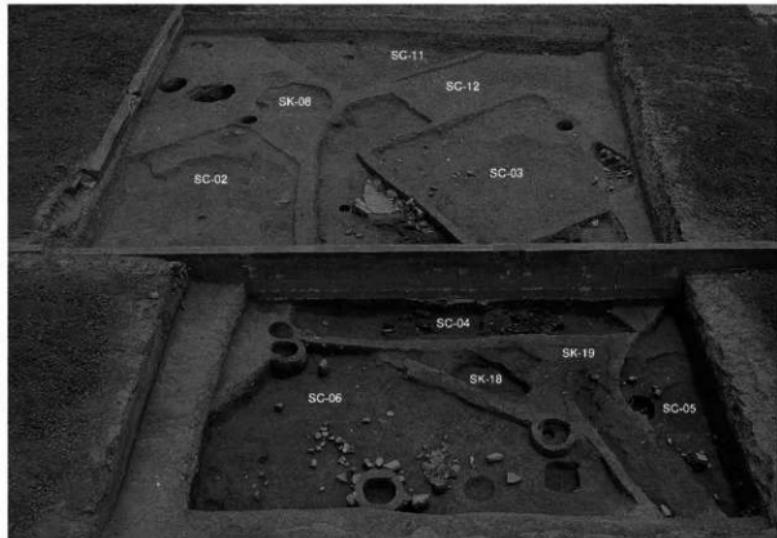
ph.4 I区3号土壙(西から)



ph.5 1号焼土壙、7号土壙(北から)



ph.6 I区23号土壙(南から)



ph.7 II区全景(西から)



ph.8 II区2号住居跡(西から)



ph.9 II区3号住居跡(南から)



ph.10 4号住居跡遺物出土状況(南から)



ph.11 4号住居跡遺物出土状況(北から)



ph.12 5・6号住居跡(南から)



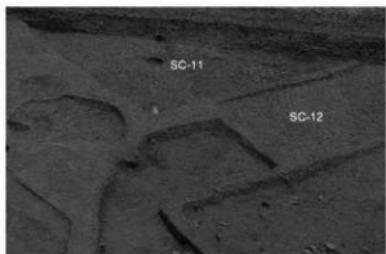
ph.13 5号住居跡(北から)



ph.14 5号住居跡遺物出土状況(南から)



ph.15 6号住居跡(西から)



ph.16 II区11・12号住居跡(東から)



ph.17 III-1区全景(東から)



ph.18 III-2区全景(西から)



ph.19 III-2区東壁土層断面(西から)



ph.20 出土遺物(縮尺不同)

報告書抄録

ふりがな 書名	かまたみながもといせき2 蒲田水ヶ元遺跡2						
副書名	蒲田水ヶ元遺跡第2次調査報告						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1073集						
編著者名	小林義彦						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL092-711-4667						
発行年月日	2010年3月23日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
かまたみながもといせき 蒲田水ヶ元遺跡	福岡市東区蒲田 3丁目191-1外	40131 0002	33° 38° 10°	130° 29° 11°	2008年6月25日～2008年8月10日	420	倉庫 事務所建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
蒲田水ヶ元 遺跡第2次	集落	弥生 古墳	墳穴住居 土壤	弥生土器 土彫器 土製品 石製品	弥生時代中～終末期の集落跡		

かまたみながもといせき

蒲田水ヶ元遺跡2

— 蒲田水ヶ元遺跡第2次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1073集

平成22(2010)年3月23日発行

発行 福岡市教育委員会
〒810-0001 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 アートプロセス
〒815-0004 福岡市南区高木二丁目8番7号